



TITLE:

<Book Review>Maung Htin Aung,
Folk Elements in Burmese
Buddhism, Oxford Univ. Press,
London, 1962,pp.xiii+140

AUTHOR(S):

工藤, 成樹

CITATION:

工藤, 成樹. <Book Review>Maung Htin Aung, Folk Elements in Burmese Buddhism, Oxford Univ. Press, London, 1962,pp.xiii+140. 東南アジア研究 1964, 1(3): 101-102

ISSUE DATE:

1964

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54833>

RIGHT:

Changes, 10 General and Theoretical Conclusions からなっている。

著者によると、英国の植民地支配や第二次世界大戦のような外部的衝撃によってもチン族の文化や社会は基本的な構造変化を受けず、チン族の個性を保持してきたという。チン族はビルマにおいて、二重のエコロジカルな適応をおこなっている。その一つはかれらの技術水準における現地環境に対するものと、他の一つはビルマ文明に対する適応である。そのチン族はいまやビルマ連邦共和国の一員として次第にその社会にくり入れられ、tribal society から Redfield 教授などのいう peasant society に推移しつつあるという。換言すると、著者はチン社会を peasant society の初期的なものとしてとらえている。その場合に、北部チン族のように伝統的に政治組織のしっかりしているものは南部チン族のようにそれが未熟なものよりも、文化の変容に対して、適応しやすいという指摘がおこなわれているのは興味深い。このような観点から著者はチン族に接近しているのであるが、なかでも力点をおいているのは社会組織の研究である。4章と5章にかけて、本書の三分の一ほどのページ数をその分析にあてている。ここでは北部チン族と南部チン族の社会組織が比較研究されている。北部チン族は南部チン族よりも資本蓄積がおこなわれ、社会的階層分化も発達し、政治組織も強固である。南北チン族のこのような差異の原因を著者は生産技術、通商、婚姻制度、儀礼等のあり方の違いに求めて論じている。

本書全体を振り返ってみると、以上の概要にもみられるように、各所に優れた記述や分析がある。しかしながら、限られた紙面に著者はあまりにもいろいろな内容を盛り込もうとしすぎた感がある。加えて、わずか1年半のフィールド・ワークの間に3カ月とか6カ月単位で、調査村をいくつか歩き廻ったために、なにか重量感にとばしいモノグラフになってしまった。その上、各章でみられる記述や分析が本書全体を通して、一つの文脈に有機的に総合されていないのは残念である。

(飯島 茂)

Maung Htin Aung: Folk Elements in Burmese Buddhism. Oxford Univ. Press, London. 1962. pp. xiii + 140

著者U Htin Aung は Rangoon 大学卒業後 London, Dublin, Cambridge に学び、帰国後 Rangoon

大学英文学教授、1946年学長となり、その間 Burma Historical Commission 及び Burma Research Society の会長として特にビルマ民俗学の確立に努力し、その方面の権威として知られ現在はセイロン駐割ビルマ大使として外交に活躍している。Alchemy and Alchemists in Burma, Burmese Drama, Burmese Law Tales, Burmese Folk-Tales 等数多くの著作を有する。本書は1952より1958年に至る七年間ビルマ研究協会年次大会で順次発表された七篇の論文に、1958年 Atlantic Monthly のビルマ特集所録の「ビルマ仏教に於ける民俗的要素」を加え、更に本書出版に際し新たに書かれた「アリ僧侶と仏教伝来」をつけた全篇九章から成立っている。著者の先祖は三十七 Nats の一人と伝えられ、その家系に伝わる神秘信仰の為ビルマ社会に見られる超自然的要素に深い同情と関心を持つ著者は、特に外来文化である仏教に併呑され純粋性を失ったビルマ的なものを、神話伝説、或は風俗習慣の中に求め、伝えようと努力してきた。本書は今日のビルマ仏教に見られる非仏教的要素を取上げ、それ等を Anawrahta の仏教支配が確立した1056年以前の原初形態にまで逆上らせ関連づけようとする意図を以て書かれた。第一章ビルマ仏教に於ける民族的要素から、ビルマの九神礼拝、新年祭、鍊金術、魔術信仰、ナットの王大山王、三十七神、得道式、アリ僧侶と仏教伝来に至る九章は、適度の諸譚と実証性を以て論ぜられ、単に読物として面白いばかりでなく、ビルマ社会やビルマ人の根底を流れる思考を理解する上にも欠くことの出来ない知識を与えてくれる。これ等論文の中、特に九神礼拝や得道式、アリ信仰に関するものは、発表当時大きな論争をまきおこし、著者は一時批判と嘲笑の渦中に耐え忍ばなければならなかった。批判嘲笑は学問的というより、むしろ頑迷な信仰からする感情的なものであった。例えばアリは上座仏教伝来以前上ビルマにあった呪術的迷信の祭祀を行なう僧であるとする常識に対して、著者は第九章に於てそれが大乘仏教後期の密教的なものと印度教の混合であることを明らかにし、現ビルマ人の信仰する所謂純粋に仏説であるとする上座仏教の中にもこうしたアリのものが多々残されていることを指摘し、ビルマ仏教の純粋性を誇る世間的常識に頂門の一簣を与えた。本書は更に付録としてタイの新年、灯火の祭り、三十七神の詳細なりリスト、及び竜神信仰の

四項を加え、タイ正月 Songkran がビルマの正月 Thingyan を語源としている等文化交渉の資料を豊富に与え、類書の少ないこの方面にあって甚だ便利な概論として一読をすすめたい好著である。

(工藤成樹)

McVey, Ruth (ed.): Indonesia. Southeast Asia Studies, Yale University (By arrangement with Hraf Press). 1963. pp. 471

本書は、Human Relations Area FilesのSurvey of World Cultures シリーズの一冊であるが、インドネシアについて、同シリーズから出版された旧版(全三巻)の内容とは、かなり趣をことにしている。旧初版は、1956年に、Stephen W. Reed によって編集され、1959年には、John Cookson などにより改訂されている。いずれも限定版であり、内容も百科全書的で、貴重な資料を含んではいるが、現代インドネシアの複雑な諸問題を理解するためには、欠ける所が多い。しかし、本書は、問題重点的にインドネシア全体の分析概観を試みている諸論文によって構成されている。執筆者も地理学の Karl J. Pelzer. 人類学の Hildred Geertz, 華僑研究の G. William Skinner, 経済史の Douglas S. Paauw, 労働問題の Everet D. Hawkins, 歴史の Robert van Niel, 政治史の Herbert Feith, 文学の Anthony H. Johns, 芸術の Mantle Hood と、夫々の分野の専門家が担当しているほか、本書の内容に関するコンサルタントを見ても、Henry J. Benda, John M. Echols, Clifford Geertz, Benjamin Higgins, Claire Holt, George McT. Kahin, J. D. Legge, Daniel S. Lev など、アメリカの現代インドネシア研究の総力を結集した観さえある。

若干の論文の内容を紹介してみよう。Pelzer の自然・人的資源に関する論文は、気象と植物資源の関係、鉱物資源の分布、貯蔵量や人口の増加、移動、分布について論じ、中でも前世紀の人口増加は、衛生状態の改善によるよりも、人口調査技術の発達によるとの指摘は、興味深い。Geertz の文化についての論文にも、インドネシア全体を統一的に概観する努力が見られ、特に文化の地域的、階層的な違いを、大都市の metropolitan super culture と新中産層や農民の文化の対比において、統一的に理解しようとする試み

は、インドネシア社会全体の基礎構造を理解する上に、有益な方法と考えられる。Skinner の華僑に関する論文で注目されるのは、華僑分布の概数であろう。この問題には、土着文化への華僑の同化の程度が当然ひっかかる。同化の程度と内外の政情変化にともなう華僑の政治志向との関連の分析も、示唆する点が少ない。農業については、Pelzer が執筆しているが、新しい資料にもとづき、農地と農産物、人口と土地所有の問題などが取り上げられ、未だ重要な経済活動であるインドネシアの農業の発展のためには、政府による組織的、科学的技術の導入が必要であると、Pelzer は主張する。Paauw は、植民地経済体制から「指導された経済体制」(Ekonomi Terpimpin)までの推移過程を多角的に論じ、Hawkins は、民族主義運動の指導期より重要な役割を演じた労働組織にまつわる諸問題を論じ、労働組織は、比較的安定しているものの、労働意欲の低いことが、今後の問題の一つとなるであろうことを指摘している。

いずれも、現代インドネシアを理解する上に有益な力作ばかりである。
(口羽益生)

Geertz, Clifford: Peddlers and Princes, Social Change and Economic Modernization in Two Indonesian Towns. The University of Chicago Press, Chicago and London. 1963. pp. 157

伝統社会から、経済が比較的優位を占める近代社会への移行過程が、抽象レベルの高い二分法(伝統主義対合理主義など)によって理解される時、屢々伝統社会内部の特殊性は無視され勝ちである。しかし、伝統社会の内容は、必ずしも一様ではない。「伝統」から「近代」への変容過程は、「伝統」の在り方によって成り異なっている。この事実を視角を合せて、Geertz は、本書で、東部ジャワの Modjokuto (仮名) 町とバリ島南西の Tabanan 町を比較する。夫々の町の特徴を巧みに浮き彫りにした鮮かな筆致による比較叙述の仕方も大いに参考になるが、一国の経済発展の理解のために、特定地域の集約的研究は、どのような方法で貢献し、又どのような点に着眼すべきかなどに関する彼の卓見は、同様の問題に関心を持つ者にとって、極めて有益である。

Modjokuto に関する Geertz の秀れた諸研究は、